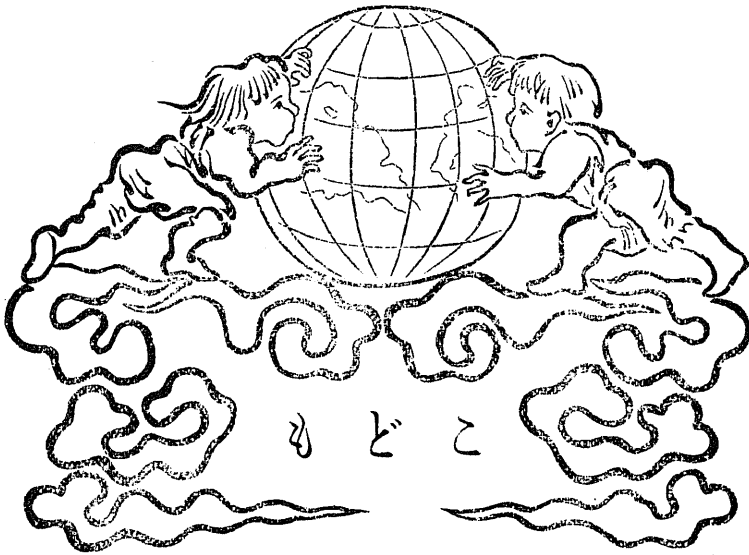


もどり子と人婦
號九第卷貳第



六人の武者修行。

やまとの翁

むかし、ある所に、兵太郎
 郎とゆう男がありました。
 何か甘い仕事を見つけたい
 ものだと、いろいろ考えた
 所で、一つ、方々の國々を
 旅行して、いゝ事をさがし
 出るとゆうので、家を出
 て、だんくと、歩いて行
 て大きな森の中え着きまし

た。そこで、兵太郎わ、一本の木の木の蔭の所に休んで、煙草など



はて、世の中にな、力の強いものもあればあるものだな

と、思つて、兵太郎わ感心して見て居ましたが、やがて、側え行つて、

兵「オイ、若いの、お前の名わ、何とゆーのか」

飲みながら、ひよつと、向の方を見ると、年の頃二十才許りの一人の男が、十圍もある檜の大木を、丸で藁すべを抜く様な調子で、根ごと何本もく引っこぬいて、見て居る内に、十本も引きぬいて仕舞いました。

若『金太郎といーます』

兵『お前の家わ、何所だね』

金『ぢき、此山の下です』

兵『どーだ、先から見ると、大變な力持だね、これから、私の家來になつて、一所に行かないか』

金『どーか、お供を願います。けども、今から此薪を束ねて、お母さん所え持つといてきますから、一寸お待ち下さい』
 といつて、金太郎わ、十圍もある様な大木を十本一束にして、
 『やっ』と、肩にかついで、走って行きました。

兵太郎、暫く、そこに待つて居ると、やがて、金太郎わ、す
 たく走つて歸つてきました。

『でわ、これから、二人で直ゆこー』

とゆーので、連れだって出かけました、暫らく行きました所が、今度わ、向ーの方に、一人の獵人が、片々の膝をついて、鐵砲をねらって居る。そこで、兵太郎わ、つかくと其側え行って、

『何をねらって居るのです』

と聞きますと、其獵人の申しますにわ

『なーに、こゝから二里先にある檜の枝に、蠅が一匹、とまつて居る、その左の眼を、打とーと思ひますのさ』

これにわ、又兵太郎わ、驚きました。二里もある所の、蠅の、しかも左の眼を打つとゆーのですから。そこで、名前を聞くと、

『千里眼明』と答えた。夫から、兵太郎が

『どーだ、已おれの家け來らいになる氣きわないか、三人さんじんで行ゆけば、世界せかいに恐おそいものなしたが』

と申まをしますと、眼め明あきも、直すく承しやう知ちしました。夫それで、三人さんじんづれになつて、こゝから出でかけまして、四し五ご里りも、歩あいて行いきました所ところが、向むかひの方はうに、風かぜ車ぐるまが七ななつもある、夫それが、不ふ思し儀ぎなことにわ、何ど所こにも、風かぜが吹ふいて居いない、一いち枚まいの木きの葉はも動うごいて居いないのに、其その風かぜ車ぐるま丈だけか、七ななつも揃そろって、ガタく、ガタくと回まわって居おります。夫それを見みてから、兵ひやう太た郎らうわ『これわ不ふ思し儀ぎだ、風かぜも吹ふかないのに、あの風かぜ車ぐるまが獨ひとり手てに廻まわって居いる。何なにが廻まわして居いるのだろー』

二人ふたりの家け來らいも、皆みな不ふ思し儀ぎだくといいって、行ゆきましたが、夫それ

から二里許も、行きました所が、一人の男が、木の上六に上って居て、片々の鼻の孔を、塞いで、片々の孔から、一生懸命に、吹き出して居ます。

「オヤ、く妙な人もあるものだな、オイ、木の上の人、鼻の孔から何を吹き出して居るのか」

と、下から兵太郎が、尋ねますと、其男、木の上から

「お前さん、こゝから二里半前に、風車が七つありましたら、

私わ、こゝで、鼻の孔から、其風車を吹き廻して居るのです」

「オヤ、これは又、えらい奴だ」と、兵太郎わ、心の中で感心

しまして、名前を聞くと、『風尾吹彦』といひます。

『どーだ、吾々四人揃って行ったら、天下敵なした。今から已

の家來になつて、行こーじやないか』

といへますると、吹彦もすぐ承知して、お供をします。

さし、愈四人つれになつて、行きました所が、今度出遭つたのわ片々の足にだけ草鞋をばいて、一本足で歩いて居ます。そこで兵太郎わ

『お前さん、何故、片一本の足で歩いて居るんです』

と尋ねますと、其男わ

『イヤ、私わ、走る事が得手なんですが、兩方の足で歩きますと、鳥の飛ぶ様な具合に、あんまり早く走り過ぎるもんですから、この通り一本足で歩いて居ます』。

名前を聞きますと『百里次郎』と答えました。そこで、これ

もまた、兵太郎の家來になつて、いよく五人の同勢で、ゆき
 ました所が、また一人の男に、遭いました。其男わ、笠を横丁
 にかぶつてやつて來ます。そこで、兵太郎が、其男に向つて
 『オヤ、お前さん、何故そんなに、笠を横丁にかぶるので
 す、何だか、馬鹿の様に見えるじやないか、眞直にしてはど
 です』

と申しますと、其男のゆゑにわ

『さ、之にわ譯のあることです。とゆゑのわ、若し此笠を眞
 直にかぶりますと、甚い冷めたい霜が降りて、其爲に空に飛ん
 だる鳥など、凍つて落ちて來ます、ですから、馬鹿の様だけど
 も、こんなにかぶつて居ます』

この男の名わ、寒井國冬といーまして、又兵太郎の家來になりました。

これで、とーく六人になって、愈々出かけて行きました。さて、手始めに、或國に着きました所が、その王様のお姫様とゆーのが大層、走ることの早い名人なのです。そこで王様わ「己の姫と競走して勝てるものがあつたら、其人に姫をやる。」若し、姫に負けたら、其者の生命を取ろ」と、こーゆーお布告を出して、競走者を探して居ます。六人の者わ、これを聞て『こりや面白い、一番吾々の中から、競走者をだそーじやないか』とゆーことで、早速兵太郎から、『家來の百里次郎をお姫様の相手にさして下さい』と願ひ出ました。すると王様の方で



わ、早速おゆるし下さったが、其代り『百里次郎が負けた時わ、家來の次郎わ申すに及ばず、主人の兵太郎も首がないぞ』とゆーことです。兵太郎の方でも、もとより承知して居ますとゆーことを申し上げて置きました。

さて、いよく競走の日となる、場所わお城の大手前と決つて居る、國中の人わ、今日こそお姫様と、百里次郎との晴の競走だとゆーので、吾もくと見物にくる。一段高い所には、棧敷をこしらえて、王様が御覽になる。

そこえ、お姫様と次郎とが、しづくと并んで出て來ました。見物人は、之を見て、一同に手を拍つてワイワイとはやしました。

競争の距離わ、二十里とゆーのである。即こゝから十里先に
 池がある、早くそこえ走りついて、一番に其池の水を持ち歸つ
 たものが勝たとゆーことです。そこで、次郎とお姫様とわ、各
 自手に一つの茶碗を持って、王様の前に立って、一―二―、三
 で二人が駆け出したけれども、四五足も一所に并んで走ったか
 と思ふ中に、次郎の方わ、もゝ影も形も見えない。丸で颯と風
 が吹き過ぎた様だ。そこで次郎わ、すぐ十里先きの池に行つて
 茶碗に水を入れて歸つて來かゝったが、途中まで來ると、急に
 足勞れて、眠くつて堪らなくなつたから、『まゝよ、姫の影わま
 だ見えない、一寸こゝらで一寢入しましよ』とゆーので水の
 入つた茶碗を側に置いて、側にあつた大きな石を枕にして、う

とうとう眠りかけました。

さーお姫様の方わ、一生懸命だ、走って走って、どんく走ってやっと池について、水を酌んで、かけって来た所が、途中で来て来ると、相手の次郎わ、石を枕にして、ぐっすり寝込んで仕舞って居る。之を御覧になったお姫様わ、大喜び『さー、もー妾しものだよ、どーしたって、負けやしないわ』と仰って、走り出そーとしましたが、此お姫様わ、悪い人です、ひよっと、途中で追っ付かれてわ大變だと思つて、そっと側に置いてあつた、次郎の茶碗の水をあけて仕まつて、それから一生懸命に走り出しました。

さー、もー大抵勝負わきまつて仕舞いました。お姫様が一番

になるでしよ。けれども、そー甘くわ行かない。先程から、
 ひょつとこんな事もあろーかと、城の櫓に上って、一生懸命に
 此勝負を見て居った。獵人の千里眼明わ、今しもお姫様が勝ち
 そーになつたもんだから、もー之までだと思つて、鐵砲に玉を
 こめて、寢て居る次郎の枕を目がけて、ズドンと一發打ち出
 しました。鐵砲の玉が枕にあたつたので、次郎わ吃驚して、目
 を覺まして、『之わ寢すでした』と思つて、茶碗を見ると、水が
 ない。『さー仕舞つた』と思つたが、夫でも力を落さない。又風
 の吹き過る様に走つて行つて、池の水を酌んで歸つて、すたす
 たと走つて途中でとーくお姫様を追い越して、丁度決勝點え
 付いたのが、お姫様より十分丈早かつた。(つゞく)